

聖霊降臨節第16主日説教 「右の手をなすことを左の手に知らせるな」 要旨  
牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2021年8月22日

マタイによる福音書6:1~4

9月の第一主日を「振起日」と定める教会があります。ですから、気を引き締め、私たちも今一度自らの信仰を奮い起こす必要があるのですが、それは、責任を果たし得るところで増し加えられるものが信仰ゆえの恵みでもあるからです。そこで、思い起こされる御言葉が「強く、雄々しくあれ」との御言葉です。それは、この神様の励ましの中に現されているものが神様の愛でもあるからです。それゆえ、この「強く、雄々しくあれ」との励ましは、聖書の御言葉の中で様々な場面で目にすることになります。従って、この「強く、雄々しくあれ」との御言葉はスローガンのように私たちの頭の上を通り過ぎるだけのものではありません。神様がこの「強く、雄々しくあれ」と人々に語ると同時に、「私は・・・あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもない」と語っているように、この「共にある」というところ上に築かれるものが私たちと神様との関係性でもあるからです。つまり、神様の愛は、この「共にある」という、私たちの直接的体験に基づくものであり、この実体験の上に築かれるものが、まさに神様と私たちとの関わりであるということです。

ですから、この関係性にしっかりと立ち、私たちが一つ一つの御言葉に聞いていくなら、世界はどのように映るのでしょうか。それは、御言葉が語るように光あふれる世界です。それゆえ、御言葉が語るように、私たちはこの世界に対して責任を負っているのですが、ただし、私たちが責任を負うのは、御言葉が単にそう命じているからではありません。私たちの神様への応答は空気を吸って吐くようなもので、意識して意図的に何かをすることはごくごく自然な振る舞いであり、それゆえ、信仰ゆえの喜びも感謝もそこから自ずと湧き起こってくることになるのです。従って、この日の御言葉はそんな私たちの素朴なあり方から離れたものではありません。ですから、そういう意味でも神様の「強く、雄々しくあれ」との励ましを私たちは蔑ろにすることはできません。神様の直接的な愛は今この時の私たちの上に置かれているものでもある

からです。そして、このことはつまり、それが私たちが日常的に見て聞いていることであり、その上で御言葉を通し、私たちは様々な真実を知らされてもいるのです。

先週、私たちは「わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずで」と語るコリント教会に向けられたパウロの励ましを野田先生を通して聞いたわけですが、そこで私たちが知らされたことが神様の赦しでもありました。それは、私たちがまさに神様と共にあるからでもあります。それゆえ、私たちはこの恵みの上にしっかりと立ち続けなければなりません。ですから、パウロがまた別の箇所で「愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。」と語るのとは、そんな神様に赦された私たち信仰者のあり方について語っているということです。そして、それが、私たちが神様とイエス様と共にあるということでもありますが、つまりは、神様とイエス様と同じものを今この時この目で見て、この耳で聞いて、神様が造られたこの世界の真実な姿を赦されているのが私たちであり、それゆえに、私たちはこの幸いを心と体で感じることも許されてもいるのです。ですから、パウロが言うようにそこに嘘偽りがあってはなりませんし、そもそもこのところ言えば、こうして御言葉に聞いているという意味では私たちに嘘偽りなどあり得ようはずもないのです。従って、私たちが日常的に見ていること、聞いていることがそのまま人に伝わるのは、私たちがこの赦しに生きているからでもあります。そこで、そのことを考えながら、今から25年以上前にあった、あることを思いだしたのです。それは、友人牧師の当時五歳だった女の子とのやり取りです。

ある時、その女の子は私にこうやってきたのです。「黒田先生、ガメラ知っているんだよね」と。そこで、友人の方を

見ると、にやりと笑って、事の経緯を説明してくれたのですが、それは前日の夜の家族団らんの中でのことでありました。家族で怪獣ガメラの映画を見ていた際、東京タワーが倒される場面があり、そこで、友人がこの五歳の女の子に語ったことが「黒田先生は東京生まれだから、このシーンを直接見ているんだよ。明日来たらどんな様子だったかよく聞いてみたらいいよ」ということでした。ですから、私への質問は、ガメラの目撃者である僕はすごい、素晴らしい、その人にいろいろ聞いてみたい、そういうことでもありますが、そこで子供の気持ちを踏み込んではいけなと考へた私たち二人は、女の子が見たそのままの世界と一緒に話をしてあげたのです。すると、その子は私たちの一言一言に深く感動し、とても喜んでくれました。ですから、そのときの思い起こすと、みんな、とてもいい時間を過ごしたようにも思ふのです。ところが、ある時、この楽しい時間に突然の終止符が打たれることになったのです。それは、その子が真実であると思っていたことが実は真実ではなかったと、ある時、この事実を知ってしまったからです。

けれども、友人と二人でその子に話をしたことは、その子も、私たちも同じように見て聞いたことに基づいてのものでありました。つまり、私たちは、ある一つの事実を共有し、それに基づいてある時期を過ごしたということです。けれども、それによって私たちの関係性がいつまでも続くことはなかった、それは、事実として示されたことが虚構の世界のものであったからです。けれども、ガメラの存在を信じる女の子にそれが嘘偽りであると伝えることが真実を伝えるということなのでしょう。また、少しずつ成長するその子にいつまでもガメラが実在するがごとく信じさせ、そこに築かれた関係性をいつまでも持続させることが私たちに求められている誠実な態度だと言えるのでしょうか。そして、もう一つ、友人と二人でその子に話をしてあげたことは虚構の世界のことではあります。けれども、私たちには悪意はありませんでした。むしろ、喜ばしてあげようという善意に満ちたものでもありました。ただ、善意であれ、悪意であれ、そこで語られたことが真実に基づいているければ、いずれ飽きられ、忘れ去られることにもなるのでしょう。では、私たちが日常的に見て聞いていると、先程申し上げていることはどうなのでしょう

か。

聖書の御言葉が私たちに向かって繰り返すことは、「見よ」、「聞け」ということです。それは、神様と私たち、イエス様と私たちとの関係性が直接的な体験に基づくものであるからです。それゆえ、この日、イエス様が私たちに語っていることは、神様の愛の直接性という、この前提に立ってイエス様がここで何かを語っているということでもありませんが、そして、この前提には、復讐するなかれ、敵を愛せよ、とのこの言葉も含まれているのです。つまりは、この直前にイエス様が「だから、あなたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」と語るように、ここでのことは、前回の礼拝でも申し上げたように、イエス様に倣い、完全とされている私たちには、当然のごとく求められているものだという事です。そして、それは、私たちが聖書の語る真実を見つめ、御言葉を通し、神様の御旨を日々聞いているからです。ですから、最後のところでイエス様が「隠れたことを見ておられる父が、あなたがたに報いてくださる」と仰ることは、私たちには分からないことではないはずですが、なぜなら、イエス様の見ているものを私たちが見て、また、イエス様が聞いているものを私たちが聞いている以上、ここで語られていることは、私たちが日常的に経験しているはずのものでもあるからです。しかし、イエス様はこの言わずとも知れたことをまるで言い聞かせるように敢えてここでこのように語るのです。それは、どうしてなのか。それは、私たちに、ある大切な事実を伝えたいからです。

キリスト教に限らず、世界に広まったあらゆる宗教は、人々に善き行いを勧めます。そして、この善行こそがそれぞれの宗教の発展を助けることにもなったのですが、ちなみに、私たちはこの善行を「愛」と呼んだりもするのです。しかし、善行は私たちだけの専売特許ではありません。仏教もイスラム教も、また、それ以外の諸宗教も、善行を積むことはその信仰においての必須条件であり、従って、それを世に現すことはあらゆる宗教の喫緊の課題となるのです。つまりは、今なすべきことであるということでしょう。ところが、イエス様はどうでしょう。まるで私たちの手足を縛るかのよう、それを人前でひけらかしてはならないと仰るのです。前回に引き続き、ここでもそうなのですが、このようにイエス

様はまた一段ハードルを上げるのです。が、それは、私たちに完全さを求めてのことでもあるのでしょう。それゆえ、私たちは、イエス様が仰ることを通して自らを顧みることになるのですが、では、そこで私たちは何を感ずることになるのか。それは、自分自身の卑しさです。そして、それは、私たちがまさに御言葉の中に生きていくからです。

このように私たちは、御言葉に聞き、そこに現されるそれぞれの光景を見つめるだけでなく、そこにある自らの姿をイエス様のお言葉を通し知らされるのです。それが私たちが置かれている日常的な有様であり、そして、それが、私たちが普段から見て聞いているものでもあるのです。ですから、そこで知らされる卑しさは、己をむなしくさせ、私たちに謙らせることにもなるのでしょう。しかし、己の卑しさを知ることとは、その頭を低くさせるだけではありません。冒頭において申し上げたように、その私たちがイエス様と共にあるがゆえに、神様の赦しに与っていてもいるのです。従って、己の卑しさを知ることとは私たちに神様の恵みに与る機会であり、それは、こぼりのありのままの姿を通し、私たちは神様の愛を深く知られることにもなるからです。ですから、私たちがこの神様の愛にこえよう、こえたいと思ふのはそれゆえのことでもありますが、ところが、その私たちが愛をもってこえることに恐れを抱くのはどうしてなのでしょう。一体私たちは何を恐れ、愛することを避けようとしてしまうのでしょうか。それがここでイエス様がこのように語るところの理由です。

私たちが頭を低く低くする中で知らされることは、私たちの手に負えないことと、手に余ることでもあるのでしょう。そして、それが、イエス様の十字架の出来事であり、この上に置かれているものが神様の愛でもあるのです。従って、十字架は私たちの善意でも、ましてや悪意をもってしても克服することはできません。私たち人間のどんな善意も、どんな善行も、十字架を克服することはできなかったからです。そして、イエス様の十字架を前にした人々だけでなく、そのことを経験的に知っているのがこうして御言葉に聞き、御言葉が語るそのままの世界を見つめる私たちでもあるのです。それゆえ、愛するという言葉は、私たちにとっての殺し文句ともなるのでしょう。それは、愛という言葉をもって私たちが先ず知られることは自らの内に愛がな

いということでもあるからです。

愛という言葉が私たちの胸の内に迫るとき、私たちは愛がない己、愛することのない己、愛を蔑ろにしている己を深く知らされることになります。それは、私たちが、愛という言葉を感じと喜びをもつて受け止めながらも、イエス様と同じ所には決して立てない、立ち得ない、御言葉を通しこの愛を深く知れば知るほど、このことに恐れを抱かずにはいられないからです。そして、それが、私たちが御言葉を見つめ、御言葉にこうして聞いているということでもありますが、では、その上で私たちがもし御言葉が語るところを語られているままに、語られているように、この愛という善行を必死にならなければならないとすると、そこでどういふことが起こるのでしょうか。それは、嘘と誤魔化しです。私たちが愛を語りながらも愛のない己を恐れるがあまり、必死になって真実を隠そうとするからです。あるいはまた、それすらも気がつかず、平然とこれが愛だと言いつけてのけたりもするのです。こうして愛は善意とも悪意ともつかないものとなってしまふことがあるのであるが、まただからこそ、イエス様はここで「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい」と語るのです。それは、「右の手のするこを左の手に知らせてはならない」と仰るように、私たちの右手にあることと左手にあることとはまったく違ふ性質のものであるからです。

しかし、最後のところでイエス様が「隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる」と仰るように、その上で、私たちのことをよくご存じであるのが天の父なる神様であり、イエス様でもあるのです。そして、それについては私たちもよく分かってはいます。ところが、そうであるにも関わらず、私たちは、大胆にもこの神様とイエス様に対して自分自身を偽り、自分自身を誤魔化そうとするのです。それは、イエス様の出来事を虚構の世界の出来事と思っているからではありません。むしろ、それは反対です。この世に実際にあったことであり、その恵みは、今も、そして、これからも、変わらずに続くことだと、そう強く信じているからです。ですから、私たちが必死にならざる善き行いをすることはこの恵みに与らうとしてのことでもありますが、けれども、そのとき、私たちが御言葉を通して見て、聞いているこの世界の主人は一体誰なのでしょう。神様なのでしょう。それともイエス様なのでしょう。

しょうか。そのいづれでもありません。つまり、それをするかしないかに私たちが拘る限り、世界の主人は私という一人称であり、世界はこの私というものを通してしか見えなくなってしまうのです。けれども、世界の主人は神様であり、その独り子であるイエス様を、私たちが生きるこの世界へとお遣わしになつたのが父なる神様でもありました。私たちは今、イエス様からこの世界のあらまし、そのあり方、さらには、そこに私たちがこうして生きていることを直接見て聞いているのですが、では、それは一体どういうことなのでしょう。

神様の造られた世界をイエス様と共に歩んでいるということとは、イエス様がこちら側ではなく、私たちの生きるこちら側におられるということとです。そして、私たちがこちら側でそのイエス様と共に歩んでいるということとは、先々を考え、計画をよく練って、きちんと筋道を立てて、その上で行動に移さねばならないということではありません。私たちの日常が私たちの思うに任せないものに満ちあふれているように、そうであるからこそ、その私たちと共にあるイエス様は心揺さぶられ、ここでもそうですが、その上で私たちにその心の内を明かし、私たちをふさわしいところへと導こうとされるのです。ですから、ここでイエス様が仰ることはそれを踏まえてのものであります。では、それを私たちが深く心に留めるにはどうしたらいいのでしょうか。それは、私、自分というものを主語にしてこの世界を見ないことです。イエス様の十字架の出来事が、神様ご自身がある意味で神様の愛というものでご自分を縛ったように、この愛に身を委ねればこそ、私たちは神を知り、神の愛を知り、神が造られたこの世界に生きる自分自身の姿を知らされることになるのです。それは、愛という名の神様の覚悟があらゆる所に現されているのが、私たちがこうして生きている世界でもあるからです。ですから、私が、というところからではなく、神が、というところから日々起こる様々なことを私たちが見つめ、また聞き、その上で様々なことを私たちが知ろうとするなら、私たちは神様がなさることを素直に受け止め、感謝と喜びをもって日々歩むこととなるのです。そして、それは、ここでもそうです。この世界に共にあるイエス様が私たちに何かを語るということは、私たちに十分な力があるからではなく、嘘と誤魔化しに満ちた私たちであっても、なお、その私たちが

のことをイエス様が信頼してくださっているからです。

ただ、イエス様がどんなに私たちのことを信頼されても、それでも私たちはその信頼に十分にこたえることはできません。そのため、それをなんとかするのが私たちの課題だとそう考えたりもするのです。けれども、イエス様がここで仰ることは、私が、私が、と自分に拘ることではなく、ファリサイ派の人々が自分の力で何とかしようとしてその可能性を狭めていったのとは違って、私たちがその信頼に値する云々以前に、それでもなお、イエス様は私たちと共にあり、信頼をもって日々私たちのことを見つめてくださっているのです。ですから、私たちが日々見て聞いていることは、このイエス様の私たちに向けられた信頼であり、つまりは、このイエス様の眼差しを通して、様々なものを見て、聞いているのが私たちでもあるのです。それゆえ、私たちの信仰は、偽善者のように偽りの仮面を被るものではありません。人の善意と悪意という仮面を被り、私たちはこの世界を見つめるのではなく、あらゆる場面で、主が、イエス様が、神様がと、私たちがそこから世界を見つめるからこそ、私たちは神様とイエス様の愛を幼子のよう素直に感謝し、喜び、受け止めることができるのです。そして、ここが肝心なところだと思いますが、ただから、私たちが、幼子のよう素直に喜んで、楽しそうにあらゆるものにこの愛を現すことにもなるのです。それは、神様とイエス様が共にいますところに私たちが生きているからであり、あらゆる善いものは、そこから私たちを通して世に現されることにもなるからです。ですから、私たちにあって責任を果たすということはそういう意味のこととありますが、ただし、それは、だから、私たちがつつがなく物事を上手く運べるということではありません。間違いがあり、失敗があり、そのために嘘や誤魔化しもあるのです。けれども、そういう失敗を主の御前にあって繰り返し繰り返し問い直すからこそ、その私たちを通して、御言葉が語る場所の真実が世に現されることにもなるのです。祈りましょう。